

ドイツにおける「もう一つの過去の克服」

—ドイツ人は自国の犠牲者をどう追悼するのか—



著者：イェルク・フリードリヒ

訳者：香月恵里

みすず書房、発行2011.2.21 ￥6,930



とき 12月4日(日) 午後2時
から4時50分

ところ 岡西公民館・第1講座室

岡山市北区下伊福西町1-48 (086)253-7581

講師 香月恵里(かつきえり)さん
(岡山商科大学准教授)

講師紹介：1961年生まれ。関西学院大学大学院博士
後期課程退学。現在岡山商科大学准教授。

主要訳書

- ▼ペーター・プシビルスキー『犯行現場は党政治局——
ホーネッカー調書』(共訳)(駐文館1996)
- ▼『照らし出された戦後ドイツ——ゲオルク・ビューヒ
ナー賞記念講演集』(共訳)(人文書院2006)
- ▼ハンス・エーリヒ・ノサック『ブラックヴァルトが死
んだ——ノサック短編集』(未知谷2003)
- ▼イェルク・フリードリヒ『ドイツを焼いた戦略爆撃19
40-1945』(みすず書房2011)。

主催：岡山・十五年戦争資料センター

連絡先：TEL086-273-4068 メールアドレス YHY11646@nifty.com

要旨

ドイツのポーランド侵攻によって勃発した第二次世界大戦は、世界で数千万人もの死者を出し、ドイツ国内でも60万人ともいわれる民間人が爆撃戦の犠牲となった。その死因の多くは、イギリスで科学の粋を結集して作られた火災兵器による焼死、窒息死であったという。しかし、こうした死者たちの苦しみについて公に語ることは、ドイツ国内では戦後半世紀以上もの間、一種のタブーであった。2002年に出版された歴史書『火焰—ドイツにおける爆撃戦争』は、火災兵器の成立史とその被害の状況を、ドイツ的徹底性をもって描いた恐怖のパノラマである。この本はベスト・セラーとなったものの、同時に国内外から激しい批判に晒されることになった。

本講演では、ドイツにおける、ナチズムの反省と国際社会への復帰という「過去の克服」の過程を追うとともに、1990年代から顕著になってきた「もう一つの過去の克服」、つまり、犠牲者としてのドイツ人を認識し追悼しようという運動の発生とその現在までの歩みについて報告したい。

[書評] 難波達興「「加害」の国ドイツの「被害」を考える」
：みすず書房 <http://www.ms2.co.jp/book/detail/07551.html>
：『岡山の記憶』第13号、77-85頁